

「テキスト」が誕生する「場」をめぐる

— 文学の読みの原理的研究のために —

山下航正

はじめに

「テキスト」とは何か。

この問いに正面から向き合っている文学研究者あるいは文学教育に携わっている者が、現在どれほどいるだろうか。もちろん、この問いかけには自省の意味が少なからずある。しかし、この問いがこれまでの文学研究および文学教育研究において、その肝心な部分において等閑に付されてきたということも事実である。

ひとまずは二つの解答が予想されよう。一つは、「テキスト」を「読まれたもの」読みとられたもの」として、読者の内部に生成するものであるとする解答であり、読者論の立場にあるものである。文学教育においては多くの論考が見られるが、文学研究においては援用は少ない。もう一つは、「テキスト」を「書かれたもの」であるとするものである。小説に対して客観的な立場に立とうとするも

ので、テキスト論の立場である。

問題は、この二つの答えの是非を問うことではない。重要なのは、このように異なる解答が生じる背景として、文学作品とそれに向き合う読者という二者あるいは二者間のどこに「テキスト」なるものが生じるか（位置付けられるか）が曖昧だという事実である。それは、「テキスト」の意味付けと密に関わる、文学作品と読者の間に起こる（読み）とはどのようなものかがいまだ十分に解き明かされていないゆえの事態である。渋谷孝氏が「文学作品の根拠は、作品に内在するの、読者の意識に内在するの」という二者択一の議論はしない」と述べる背景がまさにこれであり、そして、例えば長尾高明氏の「古典教育に限らず、国語科教育界の現状を見て痛感する点は、国語学・国文学の研究者と、国語科教育の実践家との間が、他教科以上に離反していることである。（中略）国語・国文学の研究と国語科教育の研究とが一体のものとして議論される場がないに

等しい現状では、国語科教育が実社会の要請なるものに圧倒され、指導技術論や実用学の面のみを強調した魅力のないものに墮していく危険を防ぐことはできない。」という指摘²⁾にあるように、以前から指摘され自覚もされていたはずの文学研究と文学教育研究の関連性が依然として弱く感じられるのも、ここに原因があると思われる。

このような状況を打開していくために何が必要か。そして、それなぜ必要か。本稿はこれらについて考察し、文学研究と文学教育の双方を視野に入れて論じるものである。

一 バルトの「テキスト」観

「テキスト」というものが現在のように認知された背景には、罗兰・バルトによる考究³⁾がある。まずはそれを確認しておきたい。

作品は物質の断片であって（たとえばある図書館の）書物の空間の一部を占める。「テキスト」はといえば、方法的な場である。（中略）「テキスト」は作品の分解ではない。作品の方こそ「テキスト」の想像上の尻尾なのである。あるいはまた、「テキスト」は、ある作業、ある生産行為のなかでしか経験されない。したがって、「テキスト」が（たとえば、図書館の書架に）とどまっていることはありえない。「テキスト」を構成する運動は、横断である（「テキスト」はとりわけ、作品を、いくつもの作品を横断することができる）。

（中略）

要するに、作品は、それ自体が一個の普遍的記号として機能し、当然、「記号」の文明の一個の制度的範疇を表すのである。これに反して「テキスト」は、記号内容を無限に後退させ、テキストは延期させるものとなる。テキストの場は、記号表現の場である。記号表現は、《意味の最初の部分》、意味の物質的な支関として考えるべきではなく、それとはまさに反対に、意味の事後として考えるべきである。

（中略）

「テキスト」は複数的である。ということは、単に「テキスト」がいくつもの意味をもつということではなく、意味の複数性そのものを実現するということである。それは還元不可能な複数性である（ただ単に容認可能な複数性ではない）。「テキスト」は意味の共存ではない。それは通過であり、横断である。したがって「テキスト」は、たとえ自由な解釈であっても解釈に属することはありえず、爆発に、散布に属する。（中略）「テキスト」の読書は、一回性の行為である（このことが、テキストに関するいかなる帰納的・演繹的科学をも幻想に変えてしまう。テキストの《文法》は存在しないのである）。

（傍点原文。傍線引用者、以下同）後半が特に引用されるところであるが、前半部分にも注目した

い。バルトは、「テクスト」は「ある作業、ある生産行為のなかで、しか経験されない」と述べている。文学作品を例にすれば、文学作品を読むという行為がなされて初めて「テクスト」が生まれる。それゆえに「方法論的な場」であり、「意味の最初の部分」、意味の物質的な玄関として考えるべきではなく、それとはまさに反対に、意味の事後として考えるべきものだというのである。バルトが言う「テクスト」とは、へ読者によって作品から読みとられたもの（あるいはその内容）^④と言い換えることができる。そしてここから、同じ文学作品を読んでも読者によってその作品から読みとれ生み出される「テクスト」は異なり、「複数性」を持つというのも理解できる。ただし、その「複数性」は「還元不可能な複数性」であって、「容認可能な複数性」ではないとバルトは言う。「テクスト」は作品から誕生しながら誕生した瞬間にもはや別のものとなっており元の作品に還れない、ゆえに作品から「テクスト」が読みとられるという行為は「一回性の行為」であり、「テクストの《文法》」は存在しない^⑤というのである。

このように見てくると、「テクスト」に対して冒頭で見たような二つの見解がある理由が理解できる。まず、読者論においては、ひとまずへ読者によって作品から読みとられたもの^⑥というバルトの「テクスト」観が理解されていると言つてよい。だが、その「テクスト」が生じるのはどこか（作品の内なのか、それとも作品と読者

の間なのか、あるいは読者の内なのか）ということは容易に特定できず、疑問が残る。冒頭で私が「文学作品とそれに向き合う読者という二者あるいは二者間のどこに「テクスト」なるものが生じるか（位置付けられるか）が曖昧だ」と述べた所以である。そして、「テクスト」＝「書かれたもの」とするテクスト論は、バルトの「テクスト」観とは異なる、むしろエクリチュールと呼ぶべきものだということになる。

二 「テクスト」と文学教育

以上を踏まえた上で、文学教育研究（読者論）と文学研究（テクスト論）を具体的に見ていきたい。

今回の考察の契機を与えてくれたものの一つに、須貝千里氏の指摘^⑦がある。須貝氏は、山元隆春氏『文学教育基礎論の構築——読者反応を核としたリテラシー実践に向けて——』^⑧における、例えば「戦後の文学教育理論のなかで、たえず関心の中心になってきたのは、文学的コミュニケーション過程における読者の役割であったと言つてよい。そこでは、読者の創造的な文学体験を誘うテクストの機能が問題にされたために、表現分析という営みに関してもまた、テクストの表現や叙述がいかに文学体験を誘うかということが大きな問題となったのである。」^⑧といった箇所に見られる山元氏の「テクスト」という語の使用について、バルトを踏まえながら、「何度か通

読して分かったことは、同書において、この用語は正面切つて説明されて「おらず、それは「山元氏にとつては、「テキスト」という用語は自明なものであるからであろう」が、それでは「テキスト論の「テキスト」が孕んでいる決定的な問題提起性をすりぬけていく」と批判している。そして、文脈からうかがえる「テキスト」＝「書かれたモノ」という山元氏の理解では、「テキスト」を実体性としてではなく実体として扱うこととなり、エセ読みのアナキーから抜け出せないとし、次のように結んでいる。

「テキスト」という「言葉ひとつ」の問題は、「あらゆる言葉」が「対象そのもの」との隔絶に晒されているのだが、知覚以前の対象の実体性の領域との葛藤という事態によつて、日々、わたしたちは世界を創り変えている、という問題と向き合うための扉となっている。知覚以前とは言葉以前の領域であり、実体としての「対象そのもの」ではない。しかし、対象の実体性を消去することはできない。この領域をへ他者として問題にしていくなか、「読書行為そのもの」に他ならない。「言葉の力」とは、その「行為そのもの」のなかに現れる。

これを受けた山元氏も、須貝氏に答える形で論を展開している。山元氏は、著書の「中心的探求課題」である「テキストと読者との相互作用過程」について、その「相互作用過程」とは、ヴォルフガング・イーザーの言う「作品」であり、ルイーズ・ローゼンブラッ

トの言う「交流」であることを述べ、須貝氏が指摘するように氏の「テキスト」という用語が主に「書かれたモノ」の意であったことを認めている。その上で、須貝氏がいう「あらゆる言葉」が「対象そのもの」との隔絶に晒されている「事態」、「知覚以前の対象の実体性の領域との葛藤という事態」について考察し、例えばお腹を押さえて苦痛に顔をゆがめている人物の「表徴」も、その様子をへ腹痛を訴えていると解釈する人物にとつては「テキスト」となるとし、次のように述べている。

この例は、「テキスト」を「実体」としてみなしているだろうか。わたくしの頭のなかで作りに上げた例であるとはいえ、ある人物の行為に言い及んでいるのだから「実体」だと言えなくもない。しかし、ここで「テキスト」としているのはある人物そのひとではない。その人物の行為なのだ。その行為が何かの「表徴」となっているとわたくしが見なしたので、その行為は「テキスト」となったのである。そして、その人の行為をわたくしが「表徴」と見なすことと、その人の行為が「テキスト」となることと、それをわたくしが解釈してへ腹痛を訴える人物とという「作品」を作り上げることが、同時に営まれたはずである。

じつにわかりにくい物言いになってしまったが、わたくしが拙著において「テキストと読者との相互作用」が「作品」を生

み出すと述べたのは、そのような意味である。だから、その「相互作用」の過程も「作品」も一回性のものなのである。繰り返すことのできない行為になるのだ。

読者のなかに「テキスト」が成り立つことと、その読者にとつての「作品」が生起することは同時に営まれる。だからこそ「テキスト」を「解釈する」ことはできない、とも言える。読むという行為を上述のように捉えてしまうなら、解釈の妥当性の担保を「テキスト」に求めることはできないからだ。

(傍点原文)

これをまとめれば、次のようになるだろう。文学作品に向かい合った「読者のなかに」、文学作品から読み取られた「実体」ではない「テキスト」が生じ、その「テキスト」と読者との関係、氏のいう「テキストと読者との相互作用過程」において文学作品が「読者のなか」で「作品」として意味づけられる。そして「テキスト」と「作品」は同時に読者に認識されるので、「その「相互作用」の過程も「作品」も一回性のものである」ということである。

山元氏の「テキスト」観は、基本的にバルトの「テキスト」観を踏まえつつ、読者論の立場に立つものと言える。そして、「テキスト」と読者の相互作用」によって「作品」が意味づけられるのは、氏が言うように「読者のなか」においてである。だが、「テキスト」が成り立つところ、すなわち「テキスト」が誕生する「場々も

「読者のなか」であると断言するのは難しい。「相互作用」が起こるその瞬間には「テキスト」は「読者のなか」に取り込まれているということになるのだろうが、生起するのも「読者のなか」なのか、それとも読者の外で生起した瞬間「読者のなか」に入るのかは、今少し考察の余地があるように思われる。

三 「テキスト」と文学研究

続いて、文学研究、特に近代文学における「テキスト」観を代表する、テキスト論について見ていく。近代文学研究におけるテキスト論者としては、昭和六十年にともに『心』論を発表し以後の『心』論争の中心となった、小森陽一氏と石原千秋氏の名が挙げられる。

まず、小森氏の「テキスト」観についてであるが、『出来事としての読むこと』¹²⁾においては次のようである。

かつて「文学」あるいは「文学講義」という科目名がつけられていた領域が、これからは「日本語」あるいは「外国語」「テキスト分析」と名づけられることになったのです。この改名の中には、第一に、ある特定の言語表現を「文学」という特権的な領域に囲い込むのではなく、言葉で表現されたものすべてを、「テキスト」として対等にとらえ、それらの相互関係を問題にしていく、という姿勢と、第二に、「テキスト」を扱う、科学

的で理論的な分析方法を習得し、その方法に基づいた批評的実践を行うという方向性が含意されていると、わたしは考えています。
(1頁、傍点原文)

「言葉で表現されたものすべてを、「テキスト」として対等にとらえ」という表現からは、対象を「言葉で表現された」ものと限定してはいるが、「テキスト」を幅広いものとして捉えようという意図がうかがえる。「一瞬一瞬言葉としてあらわれ出て来るテキスト」(5頁)というのも同様である。「テキストとしての文字の連なり」という場(6頁)、「表現者の構成したテキストの場」(同)という箇所と合わせて、これらは「テキスト」⇨読者によって読みとられたもの(という意味合いが見て取れ、バルトの「テキスト」観と通じるものがあるようだ。

ところが、同書には次のような箇所も存する。

同時にまた、読むことの出来事性は、どんなテキストとかわる場合においても発生していることにもなるのですが、それを厳密な意味で分析的に抽出することは、個々の読者ごとの偏差があるために、やはり中々困難なことになります。

けれども夏目漱石の『坑夫』という小説は、読むことの出来事性それ自体を、一貫して喚起しつづける希有なテキストとして現象しています。
(7頁)

これ以前に、「私の直観(感)では、『坑夫』という小説ほど、文

字で書かれ、活字印刷されたテキストを読む、という行為をめぐる大切な問題を喚起するものはないように思われます。」(2頁、傍点原文)という箇所も存するが、引用の傍線部はそれ以上に、「テキスト」⇨「書かれたもの」という認識がうかがえる。それは、小森氏の『心論』[「こころ」を生成する『心臓』¹³⁾でも、「心」というテキスト「本来対話的に構成されている「心」のテキスト」という具合である。バルトの「テキスト」観を正しく捉えたものとは言えないのではないか。

このような状況は、石原千秋氏にも当てはまる。¹⁴⁾ 概略になるが、例えば「テキストはまちがわかない―小説と読者の仕事」¹⁵⁾には、先の小森氏と同様に、「こころ」というテキスト「『行人』というテキスト」という表現だけでなく、「漱石テキスト」という表現が数多く見受けられる。それらのほとんどが文学作品という語句と置き換えることができる。「テキスト」⇨「書かれたもの」の意である。そしてそれ以上に注目したいのは、同書のタイトルにもなっている(テキストはまちがわかない)ということの内容である。バルトの「テキスト」観から言えば、文学作品から読者によって読み取られたものが「テキスト」である。そして、その「テキスト」の中身の是非を検証しようにも、元の文学作品に還れない以上各読者の「テキスト」を相互比較する以外になく、そこではそれぞれが自説を主張するだけに留まってしまふ。¹⁶⁾ 読者に読みとられたものがすべてであ

り、山元氏も指摘していたように「解釈の妥当性の担保を「テクスト」に求めることはできない」。その意味では確かに「テクストはまちがわれない」と言えるが、そこから先には進めないのである。

四 「テクスト」から「語り」へ

だが、テクスト論が当時の文学研究のあり方に一石を投じたのは事実であり、またテクスト論によってもたらされた利点もある。それは、「語り」あるいは「語り手」に注目して読みが検証されてきたということである。「語り」も「語り手」もあらゆる文学作品に存在し、読者は、現象としての「語り」あるいは物語の読者への媒介者としての「語り手」を通して小説を読み進めていく。つまり、小説の読みを支えるのが「語り」あるいは「語り手」なのである。その意味でこれらは、文学作品の「読み」、また「テクスト」が誕生する「場」を考察していく際に有効な要素と言える。

田中実氏は、前出の須貝氏とともに語りと文学教育とを有機的に論じる文学研究者の一人であるが、小説について論じる中で、次のように言う。¹⁸⁾

私は、日本の近代小説の登場人物の裏には全て「語り手」が生き延びて、他者の引用ではなく「語り手」の自意識に取り込まれていると考えている。私見では、小説は「物語＋語り手」の「自己表出」であり、会話にも「語り手」が自己表出している。

「物語」とは一つ世界であり、会話の文にも「語り手」は隠れ、「物語」を進行させている。天才腹話術師いっこく堂の比喩を使ってきたのは、彼が複数の人形を使い分けるように、「物語」の人物の背後には「語り手」がいて、この「語り手」がAを等身大に語ると、Bは語れなくなることに、ここに近代小説の秘密、日本の文化土壌と《他者》の問題、すなわち「わたしのなかの他者」と了解不能の《他者》があると考えてきたからである。

田中氏が示すのは、日本の近代小説のみならず現代小説にも、また一人称小説、三人称小説のどちらにも当てはまる、小説＝「物語＋語り手」の「自己表出」という考え方である。換言すれば、小説と単なる物語との分かれ目は、語り手が語るべき物語を相対化できているか否かにあるということになる。

そして、この次の段階として、語りが文学教育とどう関わってくるのかということが問題になる。これについても田中氏の見解を参照したい。¹⁹⁾

私は読みにアナーキーな覇権を説く石井洋二郎氏の「誤読の領分」(『文学』二〇〇三・七、八)を積極的に認めることはできません。「読むこと」とは拘束された読み手の現象を認識する行為であり、読み手自身の内面を構築していくことであります。「極点」の向こう側を折り返し、「読むこと」の「実体性」を捉え、その虚偽を超えながら、これに読み手自身の生の在処、

あり方を問うのです。そこに「読むことの倫理」の地平が現れてきます。このとき読書行為は了解不能の《他者》を捉えている自身がその行為によって瓦解し、倒壊することを条件にしています。読者主体の《自己倒壊》を前提にしていると言ってもよいのですが、これを《知的了解》に終わらせると、《自己倒壊》とは無縁です。これが同時に日本語の臨界に挑むことばの仕組みに向かうこととなって、近代小説の再稼働が始まります。

氏は、文学を「読むこと」とは、拘束された読み手の現象を認識する行為であり、読み手自身の内面を構築していくことであり、それは読み手の内に《実体性》として在る「了解不能の《他者》」を通して「《自己倒壊》」が起ることであると述べている。この背景には、バルトの「テキスト」観を正面から受けとめ乗り越えるために、文学作品Ⅱ《元の文章》と、読者のなかに立ちあらわれる《本文》、その間に存する《原文》とブレ《本文》（Ⅱ《原文》の影）とを想定し、《読者》によって作品から読みとられたものとしての「テキスト」を《実体》ではなく《実体性》として、また《現象》として捉えようという思考、主張がある。確かに「テキスト」を現象として捉えれば、山元氏の見解において「テキスト」がどこに誕生するかという疑問が解決できる。須貝氏が山元氏に対し、「テキストⅡ読書行為そのもの」という「一元論」で考えるべき

という背景である。⁽²¹⁾

これを文学作品（特に小説）の授業において実現するには、読者のなかに生まれる《本文》Ⅱ《わたしのなかの本文》との葛藤を通じて、いかに読者を「了解不能の《他者》」に向かわせるかということが重要になる。そしてその鍵を握っているのが《語り》あるいは《語り手》である。読者に認識されるのは、文学作品の内部ではなく読者の内部に立ちあらわれる、現象としての《語り》あるいは《語り手》である。換言すれば、読者である「わたし」はなぜそのような《語り》を読んだか、そのように《語り手》が語っていると理解したのか、ということである。だが、それを学習者に考えさせるための、具体的な唯一無二の発問が存在しているわけではない。それは、バルトの言う「還元不可能な複数性」ということではなく、個々の文学作品における《語り》の様相、そのような《語り》からもたらされる読みのプロセスといった文学の読みの原理的研究が、まだ十分に論じられていないからである。文学研究、文学教育研究双方の側から乗り入れることが急務なのである。

おわりに——文学の読みの原理的研究に向けて——

学校教育のなかの一教科として、国語も学習者に力をも身につさせる必要がある。それは、学力低下あるいはPISA型読解力といった最近の話題を挙げるまでもなく、明確なことである。ここで国

語力について詳述はしないのだが、学習指導要領の「読む」ことの方Ⅱ読みの力について言えば、どのような教材で、どのような方法をとれば読みの力を身に付けさせることができるかという難題の答えが、いま切実に求められている。この課題に正面から向き合っている教師であれば、その思いはなおさらであろう。

例えば、山田伸代氏は文学の読みに関して次のように言う。⁽²²⁾

渋谷孝氏は、田中実・須貝千里編著『これからの文学教育』のゆくえ(右文書院 二〇〇五 七・二〇)の十九編の論文について「私の問題意識とは無縁な、『深刻な憂い顔』の『高論』で満ちている」(教育学 国語教育 二〇〇七・三 明治図書)と評しているが、日文協の実践が真に実践であると広く認められ、授業で子どもたちの「読み」が育まれるためには「読み」の方式化を進めることが肝要である。

「読み」の方式化について、別の箇所では「読みの方式のために必要なのは、まずプロットを捉えること。プロットを捉えるためには、言葉の細部に気づくこと。言葉の細部に気づくためには、想像性をもって言葉の意味を掘り起こしていくこと。」と述べている。⁽²³⁾「文学作品の(読み)の確固とした方法を探りたいという願い」⁽²⁴⁾から取り組まれた、田中氏の(読み)の理論を踏まえた見解である。ここで我々は、山田氏の思いに共感するだけでなく、氏が「方式」という表現を選んでいることに注目しなければならない。それは、こ

れを使えば確実に学習者に読みの力を付けさせられるという万能な方法、あるいはこの教材を使えば読みの力が身に付くと保証された万能な教材はないからである。もしも、それらの存在を認める方向で文学教育を進めていった場合、須貝氏や田中氏が指摘し批判する、正解到達主義、エセ価値絶対主義に陥る危険性がある。⁽²⁵⁾山田氏が言わんとするのは唯一無二の方法ではなく、(語り)を軸に文学作品を読み進めていく、その大きな方向性としての「方式」であろう。

だからこそ、文学について、また文学の(読み)について、(語り)の観点からあらためて問い直されなければならない。それは、安易にまたは楽観的に文学万能主義を唱えるものでも、また逆に文学不要論を掲げるものでもない。文学あるいは文学の(読み)を見極め、有益な部分があれば有効活用していきたいということである。そのために、繰り返しだが文学の読みの原理的研究が急務になってくる。もちろんその過程では、それらの作業に国語科教員や国語教育(文学教育)研究者のみならず文学研究者も携わると共に、文学に関する一般言説やこれまでの文学研究の成果とあわせて、文学研究者自身の読みが相対化されなければならない。それは、例えば難波博孝氏による、文学の(読み)のプロセスが「研究として論文として見るとそれは私たちだけでなく教室で子どもたちに起こる出来事ともオーバーラップしてくる」、文学には「パッと見てわからない価値があるんだよ」ということをわかるように「示してほしい」

のだが「それが示されていないことに問題がある」、「こんなに面白いんだよということやなんであんなふうに向き内向きなことばでしか語らないんですか。」といった批判に答えるためには、避けて通れない道である。

これまでの文学研究あるいは文学教育研究において、文学のへ読みへのプロセスの解明は忘れられていたわけではなく、むしろ念頭に置かれていたはずだ。だがそれが気付かぬ間に疎かになってしまっていたのである。それを克服するために、文学研究、文学教育研究双方の側から、文学の読みの原理的研究に乗り入れることが不可欠である。教育の現場にいるものとしての、また近代文学を専攻してきたものとしての責務とともに、「テキスト」とは何かを追究することは、文学のへ読みとは何かという問い、さらには文学とは何かという根元的な問いをも視野に入れた営みなのだとということや、今強く感じている。

〔注〕

- 1 渋谷孝『文学教育論批判』（昭和六十三年十月、明治図書）45頁
- 2 長尾高明『古典指導の方法』（平成二年一月、有精堂）3～4頁
- 3 ロラン・バルト『物語の構造分析』（花輪光訳、昭和五十四年十一月、みすず書房）
- 4 引用部分のみならず、前掲書には鉤括弧のない表記も多く存する。そこには「テキスト」が生まれる場」という意味合いが見て取れるのだが、若

干混用されているようにも思える。厳密には追究すべき問題だと思われるが、今は別稿に譲りたい。

5 おそらく、「テキスト」が生じる場所を作品の内だとするのは、文学（文学作品）の価値を無批判に認め、「テキスト」をへ読みとるべきもの」と捉える人々であろう。それは後述するように、価値絶対主義へと容易につながる。安易に文学の価値を論じる者は、まずここを認識せねばなるまい。

6 須貝千里「言葉ひとつ」（平成十八年九月「日本文学」）

7 山元隆春『文学教育基礎論の構築——読者反応を核としたリテラシー実践に向けて——』（平成十七年四月、溪水社）

8 前掲書（注7）4頁。

9 山元隆春「失いつづけたすべてのもの打ち上げられる場所」と「行くべきところ」との間で——文学教育の「転回」と「希望」のために——（平成十九年八月「日本文学」）

10 山元氏は、以下に引くヴォルフガング・イーザー『行為としての読書——美的作用の理論』（轡田収訳、昭和五十七年三月、岩波書店）を踏まえつつ、前掲論文のなかで、イーザーの「作品」について「バルトの言う、作家のこしらえた「作品」とは異なる、と考えている」と付言している。なお、引用は「特装版」岩波現代選書（平成十年五月）による。

作品は読者による具体化をまわって、初めてその生命をもつがゆえに、テキスト以上のものであり、具体化は読者の主観に全く束縛されないこととはないが、その主観性はテキストが与える条件を枠として働いている。つまり、テキストと読者とが収斂する場所に、文学作品が位置している。こうした場合は、当然のことながら潜在的にしかありえない。それは、テキストそのものにも、読者の主観にも還元しえないためである。これをいい換えれば、文学作品は、読書過程においてのみその独自の姿を示す、ということになる。従って、これからの議論で文学作品といえ

ば、テキストから呼びかけられた読者が遂行する構成過程を念頭に置いている。つまり、文学作品とは、読者の意識においてテキストが構成された状態を指す。

(傍点原文)

- 11 Rosenbatt, Louise M. 1938 (1983 3rd edition) *Exploration as Literature* Modern Language Association. 引用は、前掲注6論文所収の、山元氏訳による。

小説や詩や戯曲は、読者がそれを一組みの意味のあるシンボルへと変換しなければ、単なるページ上のインクの染みのままである。文学作品は、読者とテキストとの間で生じる生きた回路のうちにあられる。すなわち、読者は言語シンボルのパターンに知的・情緒的な意味を吹き込み、また言語シンボルのパターンは読者の思考と感情を導く。こういった複雑な過程の結果として、程度の差こそあれ組織化された想像的経験が生じてくる。

(p.25)

文学経験とは、読者とテキストとの《交流 (transaction) 》である
と言ひ換えなければならぬ。

(p.36)

- 12 小森陽一『出来事としての読むこと』(平成八年三月、東京大学出版会)
13 小森陽一『「ころ」を生成する「心臓」』(昭和六十年三月「成城国文学」)。
『構造としての語り』(平成元年四月、新曜社) 所収。

- 14 石原氏は著書『国語教科書の思想』(平成十七年十月、筑摩書房)の中で、「いまだに「テキスト論」から離れられない」「逃げ遅れたテキスト論者」(205頁)と自認している。

- 15 石原千秋『テキストはまちがわかない——小説と読者の仕事』(平成十六年三月、筑摩書房)

- 16 前掲書(注15)にも収録されているが、石原氏には同名の論文「テキストはまちがわかない」が二編(平成八年五月『漱石研究』第6号、及び、同年十二月『成城文藝』第156号)存する。

- 17 田中実氏が『小説の力——新しい作品論のために』(平成八年二月、大修

館書店)において、「和風てくすと論」として正しく批判している。

- 18 田中実「消えたコーヒーカップ」(平成十三年十二月「社会文学」第16号)
19 田中実「講演「舞姫」の新しい読み方(上)——機能としての「語り」——」(平成十九年一月「鷗外」80号)

- 20 田中実「原文」という第三項「ブレ」本文を求めて「および「キーワードのための試み」(ともに、田中実/須貝千里編『文学の力×教材の力理論編』(平成十三年六月、教育出版) 所収)

- 21 前掲注6参照。

- 22 山田伸代「読み」の方式化への道——第59回日本文学協会のゆくえん——
究集会に参加して——(平成十九年十二月「日本文学」)

- 23 山田伸代「読み」の方式を求めて——平成十八年四月『月刊国語教育』

- 24 前掲注23参照。

- 25 田中実・須貝千里編『これからの文学教育』のゆくえ(平成十七年七月、右文書院)、田中実「わが日本文学協会のゆくえ——再び「八〇年代問題」を今超える——」(平成十九年六月「日本文学」) など。

- 26 松澤和宏・難波博孝・高木まさき・田中実(司会)「座談会——文学と教育における公共性の問題——文学教育の根拠」(平成十五年八月「日本文学」)。
以下、長くなるが難波氏の発言に関わる箇所を引いておく。

難波 僕はむしろ文学研究の人たちにこんなことをやってほしいなと思うのはこういう読みがあってこういう理由があって、それで自分はいくついうプロセスで読み替えていったということを言っていたんだけどそれが、まさしく授業なんですよね。多分、多くの文学研究の論文というのはその辺をあまり言ってくれないんですよ、プロセスを。いきなり書くんですよ、それで根拠を言う。

松澤 いろんな読みが可能だと言っても、それは私にとって単に「あれもある、これもある」じゃないんですね。少なくとも読みの深まりと

してでなければおかしいと思いますね。

難波 それの研究として論文として見るとそれは私たちだけでなく教室で子どもたちに起こる出来事ともオーバーラップしてくるわけです。

(中略)

松澤 最後にこんなことを言うのはあれだけでも、難波さんに言いたいのは漱石もある意味では古典になっちゃったかもしれないませんが、古典というのはあらかじめその価値が容易にパッと見てわかるものじゃないですよ。だからってそれは教材として使うのは難しいとは必ずしも言えないと思います。それは研究者にとっても同じで、パッと見てわからない、自明じゃない、だからやらないという考え方は僕はそれ自身大いに問われるべきだと思いますけれど。

難波 僕はやらないなんて言っていないです。むしろ僕は文学研究者の人に言いたいのはパッと見てわからない価値があるんだよということを知るように示してほしいんですよ。それが示されていないことに問題があるんですよ。

松澤 それはわかりますよ。

難波 そうでしょう。

司会 そうです。だからそのために今日は「こころ」を一つの例に出した。「こころ」に限らずそれは時間と場所さえ与えてくれれば、どの作品でも言えますよ。

難波 そうして語ってもらえればどんなに嬉しいかと思うけど、だって文学研究の論文を読んでこの作品は面白いから読ませてみようなんて思えますか。

司会 いや、思ってもらえないんなら、それはこちらが悪いんですよ。

難波 こんなに面白いんだよということをなんであんなふうに内向きのことばでしか語らないんですか。